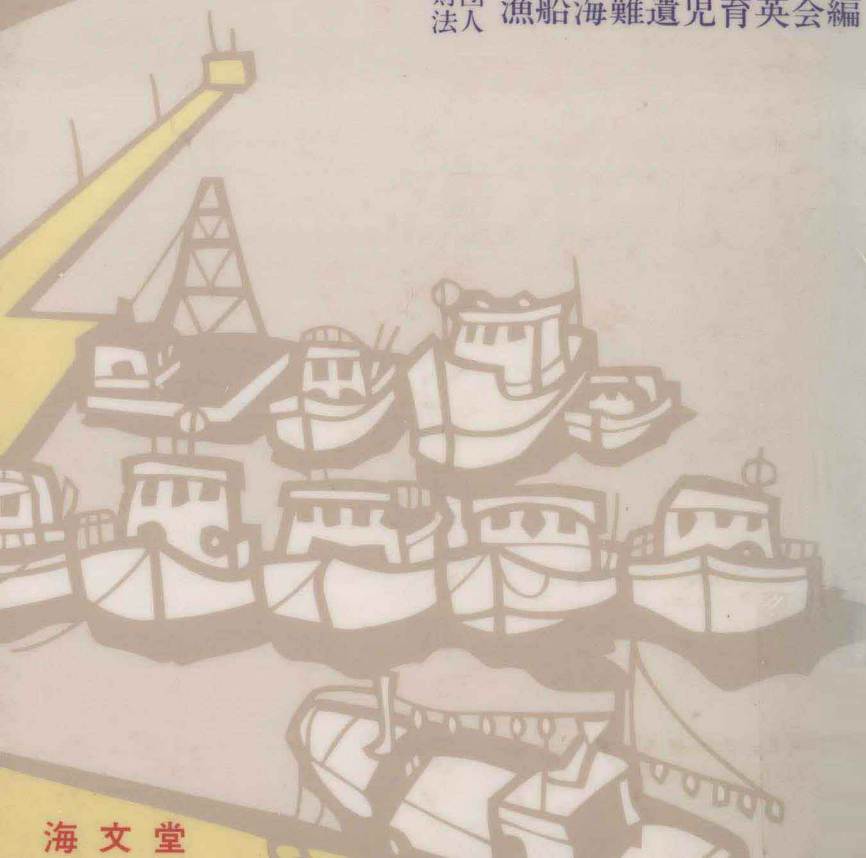


お母ちゃん、お父ちゃん買って

——漁船海難遺児と母の文集——

財団法人 漁船海難遺児育英会編



お母ちゃん、お父ちゃん買って

——漁船海難遺児と母の文集——

江苏工业学院图书馆
財団法人 漁船海難遺児育英会編
藏 书 章

海 文 堂

ISBN4-303-63710-6

お母ちゃん、お父ちゃん買って
—漁船海難遺児と母の文集—

平成2年8月7日 初版発行

© ZAIKAN HOJIN
GYOSEN KAINANJII
IKUEIKAI 1990

編者 財団法人 漁船海難遺児育英会

発行者 岡田吉弘

検印省略

発行所 海文堂出版株式会社



本社 東京都文京区水道2-5-4 (〒112)

電話 03(815)3292

支社 神戸市中央区元町通3-5-10 (〒650)

電話078(331)2664

日本書籍出版協会会員・工学書協会会員・自然科学書協会会員

PRINTED IN JAPAN

印刷 ディグ/製本 小野寺製本

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、
法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となり
ますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めて下さい。

まえがき

一言、御あいさつ申し上げます。

まず初めに、この文集を編集した漁船海難遺児育英会とは、どのような団体であるかを申し上げておきたいと思ひます。

漁業従事中に遭遇した海難事故や労働災害、あるいは船内での病死等で、尊い生命を亡くされる方は、最近、減少してはきておりますが、漁業従事者四十万人のうち毎年四百人前後もおられます。これらの方々には、家族が遺され多くの幼い子供たちがいます。育英会は、これらの子供たちが安心して勉強ができるよう、奨学生に採用して学資の給与または奨学金の貸与、その他育英に関する諸事業を通じて、励ましを贈ることを目的としている財団法人であります。

この育英会も昭和四十五年に誕生して、今年（平成二年）で二十周年を迎えましたが、育英事業の基盤は、漁業関係者をはじめ国民の皆様からの温かい御支援によって基金を

つくり、その運用益で賄われております。しかし、これのみでは資金的に十分ではありませんので、基金造成のための御支援とは別に、励ましおじさん・おばさん会員制度への御加入をお願いして、御寄付いただく資金と合わせて、事業財源としております。

現在の事業は、幼稚園（保育園）、小学校、中学校に在学する遺児奨学生には学資の給与を、高等学校、大学等に在学する奨学生には奨学金を貸与する事業が中心ですが、大学等奨学生に対する事業は、設立以来から要望がありながら、基金の造成が思うにまかせなかったこともあって、この平成二年度からやっと実施できた新規事業です。お陰をもちまして、ここによりやく事業の基本体系が整ったと心から喜ぶとともに、数々の御支援の賜物と衷心からお礼申し上げる次第でございます。

さて、漁業という産業は、その生産の場が海上ですから、陸上社会では想像できない危険があります。乗組員も経営者も事故の防止には、最善の努力をしておりますが、残念なことに、いまだいろいろな事故が後を絶っておりません。

当育英会は、事業の基礎資料にするための遺族の実態調査を行っております。これら調査が示す海難遺族の実態をみますと、一家の支柱を失ったあとはお母さんが、中には

両親を亡くし、年老いた祖父母が、子供や孫たちの養育に懸命の御努力をし、一家のくらしを支えておられます。

また子供たちがお父さんを亡くした時の年齢をみますと、小学校入学前が約二十二%、小学校低学年（一―三学年）十九%、同高学年が二十二%を占めており、そのほとんどの子供たちが幼い時に、お父さんを亡くしています。したがって、亡くなられたお父さん方は働き盛りの年齢であり、お母さん方のほとんどが三十歳代の若さで、かけがえのない御主人を亡くしておられるのです。これが、海難等の事故がもたらす結果です。

この文集は、これら遺された子供たちと、お母さん方が、懸命に書いてくれたものです。育英会が編集した文集は、五年ごとに発行を重ねていますので、この『お母ちゃん、お父ちゃん買って』が第四集目にあたります。これらの文集は、育英会の二十年の歩みでもあります。それぞれの母・子にとっては、大切な自分史の一頁をつづった貴重な記録です。どうぞ一読され、声援を送っていただきたいと願うものです。

最後に、この文集が示唆している忘れてならないことは「これ以上、遺児を出さないでください」と訴え願う、母・子の叫びです。漁業に係る者はいうまでもなく、す

べての人々がこれを真摯に受け止め、人命の尊さを今一度考え、この願いに応えなければならぬと信じてやみません。

平成二年八月

財団法人 漁船海難遺児育英会

理事長 鈴木 善 幸

目 次

お父さん、頑張るからね

長くて、短かった六年間 お父さん、頑張るからね お父さん お父さん 父さん 海の見える家 悲しい父の死 お母さん、ありがとう 天国にいるお父さんへ ばくのおとうさん ばくのお父さん 天国のお父さん やればできる 子どもを生きがいとして	岩手県 吞香美和子 3 岩手県 吞香美佳子 7 北海道 伊藤潤子 10 岩手県 須田貴浩 14 岩手県 須田浩知 16 岩手県 須田砂美子 18 新潟県 鈴木さおり 21 島根県 藤村昌慶 25 島根県 藤村梨枝 28 三重県 岩佐光晴 31 三重県 岩佐隆夫 32 福島県 塩田涼 34 鳥取県 村田玉世 37 鳥取県 村田佐和枝 40
---	---

肝っ玉母さんに変身

いま、幸せです

お父さんより年をとりました

母子四人でもうすぐ二十年

肝っ玉母さんに変身

お母さんは、がんばりや

おじいちゃんと私の奮闘記

父と母と……

主人の七回忌に思うこと

私のお母さん

この十五年間をふりかえって

わたしのおかあさん

子供の成長を願って

母の人生

主人が亡くなって

人の尊さを忘れるな

愛媛県 土居 志保 45

宮城県 鈴木 房子 49

大阪府 森田 智子 52

兵庫県 森田 美恵子 57

青森県 長根 百香 63

岩手県 坂本 順子 68

島根県 福浦 正泰 71

福岡県 佐野 タエ子 75

兵庫県 清山 純子 79

三重県 朝熊 けい子 82

三重県 三鬼 聖 86

三重県 三鬼 サエミ 90

長崎県 赤瀬 恵美子 94

岡山県 富永 富士江 98

大分県 鈴木 恵子 101

記憶の中の父

生きている父

ばくの大すきなお父さん

命

私の知らない悲しみ

海の行方

十一年目をむかえて

それから渡辺丸

父さんの知らないこと

記憶の中の父

お父さん

父と本と私

大好きだったお父さん

写真の父

変わらぬお父さんへ

鹿児島県 中浜砂月 107

島根県 桜谷光一 110

大分県 鹿野隆博 112

香川県 濱田耕弘 114

石川県 南ゆかり 116

兵庫県 渡辺順子 118

兵庫県 渡辺大勝子 122

島根県 松本由子 125

山口県 秋田稔栄 129

石川県 中道美穂 133

和歌山県 久木留昌子 136

福島県 佐藤友美 139

長崎県 平戸由紀子 142

長崎県 平戸里美 144

まわりの温かさに支えられて

お母さん、ありがとう

仁美へ

私と娘の約束

いつの日かきっと

天国のあなたへ

少しの確率

宮崎に行ったこと

私の幸せ

お母ちゃん、お父ちゃん買って

私の宝物

娘の七夕

母の留袖

宮城県	中島啓子	149
鹿児島県	藤園香織	153
高知県	川邑恵子	156
福島県	熊谷晴子	158
大分県	園健一	163
島根県	清水順子	166
石川県	玉津由香	170
大分県	浜田沙織	174
三重県	田中恵理奈	178
北海道	岩本信子	182
岩手県	蔵谷佳代子	187
岩手県	蔵谷とし子	190
青森県	長坂孝子	193

いつか心のやすまる日が

お父さんへ

千葉県 長島リキ子 199

私のきのう・きょう・あした

北海道 阿部哲子 201

人として

宮城県 千葉浩彦 204

感謝の日々

山口県 大谷真智子 208

私の家族

福島県 角京子 211

十四年を過ぎた、いま

福島県 佐々木イネ子 214

いつか心のやすまる日が

宮城県 阿部やす子 218

後がさきになつてしまつて

広島県 新家ヨ子コ 221

笑顔を忘れず生きてゆこう

福岡県 川越眞弓 225

天国の父さんと母さんへ

福岡県 阿部将彦 229

私のおばあちゃん

福岡県 阿部洋子 231

待っていた夢が来た

福岡県 阿部尚子 233

春遠からず

福岡県 阿部セキノ 236

新しい光が見えてきて

静岡県 直井龍子 240

〈表紙絵・文中カット〉

岐阜県 林 正 之

潮騒にふと父の声を聞いた
海からいつも見守ってくれている父
「がんばるよ」

そう答える子供達の目には、
父の笑顔がうかぶ――

お父さん、
頑張るからね

長くて短かった六年間

岩手県種市町宿戸小学校五年 香 香 美 和 子

私のお父さんは、六年前の三月三日のおひな様の日に、船からおっこちて死んでしまいました。

私は、ようち園だったので、よくおぼえていませんが、母とおばあちゃんがないいたので、たいへんなことがおこったんだと感じました。それからなん日かして、おそう式をしてからも、本当に死んでしまったのだろうか、どこかの小さな小さな島でもいいから、流れついて生きていてほしい……そう思い続けて六年になりました。

私が一年生に入学した時、となりの席の男の子の保ご者が、お父さんの名前なのに、私のはお母さんの名前なのが、とても不思議でした。そして、家に帰ってからお母さんに聞いたら

「美和子のお父さんはね、死んでしまったからここはずっーとお母さんの名前なんだよ。わかったかい」

と言いました。それからそのことは、聞かないようにしています。

今年の三月三日、お父さんの七年きをやりました。親せきの人たちがたくさんきてくれました。こうして、年きをやるたびに

「ああ、やっぱりお父さんは、死んでしまって帰ってこないんだなあ」と感じます。とてもさみしい気がします。

私は、今度六年生になります。お姉ちゃんは、高校生になります。私もお姉ちゃんも早く大人になって、いい仕事について、少しでもお母さんをらくにしたいと思います。私にとって、お母さんは、お母さんでもあり、